

前号でも取り上げたとおり、今年度は総務省が「地域における多文化共生推進プラン」を策定してから10年となる。今号も引き続き「多文化共生」に注目したい。

今回は少し視点を変えて、「一地域住民」として地域で活躍する外国人2名にインタビュー。活動のきっかけや思いを伺った。

地域で活躍する外国人

全国市町村国際文化研修所教務部・調査研究部 研修主幹 古川 久文
主事 川端 龍人

外国人初の自治会長

大阪府枚方市香陽台。ここに香陽台自治会初の外国人自治会長がいる。アメリカ出身のサム・テケンブロックさんだ（以下「サムさん」）。サムさんは、自治会長になり今年で8年目。「スマイル」をスローガンに、地域で自治会活動をしている。

サムさんは、30年前に来日。大学・企業での英語講師などを経て、輸入建材の営業とコンサルティングの仕事をしていた。香陽台には2006年から住んでいる。自治会というものがアメリカに存在しなかったうえ、当時は香陽台での活動も活発ではなかったため、何をやるものなのか、具体的なイメージがつかめなかったという。

<自治会長になったきっかけ>

当時、香陽台自治会の役員決めはくじ引きで行われていた。役員や自治会長のくじを引いた人は、周囲から「あちゃー、引いちゃいましたか」「大変ですね、お疲れ様です」など



サム・テケンブロックさん

と声をかけられ、面倒な役回りだと認識されていたらしい。そうした中で、サムさんは自治会長のくじを引いてしまった。

<外国人が自治会長になってもいい>

「自治会の活動をもっと楽しく活発にやりたい」と思っていたサムさんだが、自治会長になるにあたって懸念があった。「外国人である自分が自治会長になってもいいのだろうか」。

自治会長になるからには職務を全うしたい。しかし、周囲の協力がなければそれも実現できない。そんな葛藤の中一つの提案を行った。

「今の役員全員が“外国人が自治会長になってもよい”と言ってくれるなら、自分も責任を持って自治会長として活動を行います」。

結果は、満場一致で自治会長になってほしいとのこと。こうしてサムさんの活動は始まった。

<笑顔咲く住みよい地域づくり>

「与えられた仕事を嫌々やっていたら良くなるわけがない。楽しみを見つけながら、自分のベストを尽くせばきっと良い状況になるだろう」。そう思いながら、サムさんは活動を続けていった。

「カラスがゴミをあさり路上が汚い」との声に、カラス除けの折りたたみ式ゴミネットを設置。「夜道が暗く不安」対策としては、街灯をLEDに交換した。さらに公園の清掃活動も積極的に行い、雑草が生い茂り“ジャングル公園”と呼ばれていた公園も、住民一丸となって手入れをした。

「ただ単に公園の掃除と言ってしまうと参加

する人もつまらない。だから、ガーデニングと言ってみたり、参加した人に“いい汗かいて、健康になりましたね”と声をかけています”とサムさん。ここにも「スマイル」の精神が表れている。

公園での活動はさらに発展した。活発な自治会を補助金で支援する「枚方市公園アダプトプログラム」に応募。公園に花壇を新しく設置し、今でも住民が主体的に手入れや清掃を行っている。こうした活動の中で、サムさんは「枚方市緑の基本計画審議会」の委員に市民代表として選出され、市の活動にも参画していく。

サムさんは、ほかに「こんにちは、今日も清掃ありがとうございます」「調子はどうですか」など積極的な声掛けやあいさつを行い、活動のテーマである「スマイル」の実践に取り組んだ。さらに「一人暮らしのご老人にも笑顔になってもらいたい」と敬老の日にプロの落語家による落語会を企画。落語会は2011年から現在にも引き継がれ、地区の名物企画となっている。

<“いつかやらなくちゃ”に着手>

こういった活動を通じて徐々に自治会長として信頼を得ることになったサムさんは、長年の地域の困りごとを解決しようと動き出す。世帯の高齢化や独居化が進み、人数や作業内容に偏りが生じた自治会の班の再編成だ。しかし、班の再編成は住民間の相性や負担感など具体的な利害関係があらわになりやすい。それまでの自治会でも「いつかやらなくちゃ」と思いながら、なかなか取り組みずにいる難問だった。

サムさんは、この難問を「自分の性格とユーモアで解決しよう」と決意した。

まずは「班編成についてどう思っているのか」住民全員にアンケートをとることにしたが、「突然、何をするのか」と困惑の声も聞こえてきた。サムさんは「自分はよくわからないので、どのように思われているのか教えてください」と言いながら、意見を聴いて回った。

アンケート開始から3か月、特定の班に負



落語会「香陽台亭」

担が集中しないように意見調整を行いながら、ようやく9班から8班への再編成にたどり着いた。

このような取り組みを次々に行ったサムさんは、当初こそくじで選ばれた自治会長であったが、その後も推薦を受け、現在もサムさんが自治会長を務めている。この推薦は地域住民からの信頼の証に見えるが、サムさんは「他にやりたい人がいないからね」とあっさり。すでに「これからは、災害が起きたときに自治会の中で逃げ遅れる人がいないように防災訓練もしたいし、もっと具体的な避難計画をつくっていききたい」と新たな「スマイル」実践を見据えている。

<より良い隣人同士でありたい>

サムさんの精力的な活動を支えるのは何かと尋ねると、こう返ってきた。

「初めはなにがなんだかわからず大変でした。それでも少しずつ活動を始めたら、“いいね”と妻や地域の人が笑顔になった。それで、もっとみんなに笑顔になってほしいと思い、活動を続けました」。



住民みんなで作った花壇の前で

さらに、多文化共生を進めるためのポイントとして、こう続けた。

「日本には“郷に入っては郷に従え”という言葉がありますよね。これはお互いに気持ちよく住むためのよいアドバイスだと思う。新しく住む人も自分の考え方や信念まで変える必要はもちろんない。でも、すでにそこにある文化やルールは大切にしなければいけないと思う。だって、私はアメリカ人で靴を脱ぐ文化がないからといって、土足で自宅に入れたら嫌でしょう」と。

インド人“にも”住みやすいまち—西葛西

東京都江戸川区西葛西。ここには、現在2,000人のインド人が住んでおり、街なかのお店の中に溶け込むようにインド料理店やインド産の食品をそろえるスーパーが見られる。大型チェーンのスーパーにもインドコーナーが併設されているところもあり、インド人だけでなく日本人の利用者も目立つ。

秋には、ヒンズー教の収穫祭「ディワリ」にちなんだ「東京ディワリフェスタ西葛西」が開催され、国籍を問わず地域住民が参加するお祭りとなっている。都心へのアクセスもよく、適度な閑静さと便利さが共存する西葛西は、住みやすいまちとして注目を集めている地域だ。



西葛西に点在するインド食材等のお店

<西葛西からインドとの橋渡し>

この西葛西に30年以上前からお住まいのジャグモハン・S・チャンドラニさん（以下「チャンドラニさん」）。1978年に来日し、紅茶

の輸入ビジネスをする傍ら、「江戸川インド人会」の会長として活動している。

チャンドラニさんが西葛西に住み始めた当時、インド人は数世帯しかなかった。現在のようによく多くのインド人が住むようになったきっかけは10年以上前に遡る。

1999年、世界中で大きな課題となったいわゆる“2000年問題”。その対応のために多数のインド人IT技術者が来日した。当初、企業は住まいとしてホテルを準備していた。しかし、彼らの多くはベジタリアンである。ベジタリアン向けの食事ができる場所が圧倒的に少ない日本では、食事を自炊する必要があった。



ジャグモハン・S・チャンドラニさん

<住めるところがない>

こうして、都心へのアクセスがよい西葛西にも、住まいを探すインド人がちらほらと見られるようになる。この珍しい光景に、チャンドラニさんが理由を尋ねて返ってきた答えが「住まいがなかなか見つからず、1か月以上きちんとしたご飯を食べていない」だった。

なんとかしなければとチャンドラニさんも住まい探しを手伝うことにした。

しかし、部屋探しは一筋縄ではいかなかった。外国人というだけで「家賃は高いが本当に支払えるのか」「貸した途端に何人も居候するのではないか」といった偏った考えを持ち出され、苦労することが多かったという。インド人のIT技術者はエリートの高給取りであることを説明し、給料の明細書も見せた。それでも信用できないというときは、チャンド

ラニさん自身が保証人になった。

「知らない人だから関係ないと言ってしまえばそれまでだけど、何か自分にできることはないかと考えて行動しています。まあ、保証人になった際は妻に怒られたけどね」とチャンドラニさん。温かい人柄がうかがえる。

<知らない人からの苦情相談>

「私は近くのマンションに住む者だけど、隣の人がうるさいのよ、なんとかして」。

ある日チャンドラニさんが経営するお店に苦情の電話が舞い込んだ。聞くと、苦情主のお隣でインド人がホームパーティーをしているという。

日本在住のインド人ITエンジニアは、平日は遅くまで働き詰め。そのため、ゆっくりできる休日は家族や仲間と楽しく過ごしたい。しかし、ベジタリアンであったり、宗教上の理由でお酒を飲めなかったりするため、食事を楽しめる場所が限定される。自宅に仲の良い家族を呼び、ホームパーティーを行うこともしばしばあるとのこと。

チャンドラニさんは直接現場に向かい、苦情がきていること、パーティーをする際はテレビの音などを下げるように伝えた。「彼らも“人に迷惑をかけてはいけない”と教育を受けているし、無用なトラブルを避けたいとも思っている。ファシリテートさえすれば、なんとかなるだろうと思ったし、自分ならそれくらいできるだろうと思った」とチャンドラニさん。

その後、再びこのようなトラブルがあった際にすぐに対応したいと考え、区役所に行き、騒音トラブルがあったら自分に繋いでほしいと自身の電話番号を伝えたそうだ。ほかにも、在住インド人のメーリングリストを通じて、日本に住む際に気をつけるべきマナーを発信した。

今では、それらの取り組みが実を結び、すでに住んでいるインド人が新しく住むインド人に日本に住む際のマナーを教え、困りごとがあったらお互いに相談できる文化が醸成されている。

<利他の精神>

ときには保証人になるリスクを負い、ときには率先して苦情の窓口を引き受けるチャンドラニさん。なぜそこまで困っている人を助けようとするのだろうか。チャンドラニさんはこう語った。

「自分は決して困っている人を助けているというスタンスではありません。人はひとりでは生きていけないし、自分も生活をするうえで必ず誰かのお世話になっています。だから、私も地域で問題や困りごとがあると、それに対して自分のできることを自然と考えています。“自分には関係がない”と割り切ってしまう人もいますが、その人たちは自分が誰かしらのお世話になっていることを忘れてしまっているのかな」。



東京ディワリフェスタ西葛西

<取材を終えて>

「スマイル」をキーワードに活躍するサムさん、「利他の精神」で在日インド人と日本社会の間をとりもつチャンドラニさん。

おふたりともに真剣ながらもどこか楽しそうに話をされていたのが印象的でした。

読者の方のご意見、ご感想をお待ちしております。